

名古屋国税局長賞

未来を担う私たちと税金

名古屋市立東星中学校
2年 若山 実咲

テスト週間になると、私のリュックはいつも以上に重く感じられる。数学、理科、英語、社会、国語。それぞれの教科書に加えてプリントやノートが詰め込まれ、肩にずっしりとのしかかる。学校まで5回も階段にのぼらなければならず、そのたびに息が上がる。思わず、「なぜ教科書はこんなにも重いのだろう」と口にしたくなる。

中学1年生のとき、クラスメイトが教科書に落書きをしている姿を目にした。大切に扱うべきだと分かっていながら、私は何も言うことができなかつた。ただ心の中で、自分の気持ちと向き合っていた。

翌日、そのクラスメイトが先生に注意された。そんなとき、先生は教科書の裏表紙にある文を私たち全員に伝えるように話した。「この教科書は、これから日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」。

教科書が税金で無償で支給されていることはもちろん知っていた。でも、それをどこか当然のことのように受け止めていた自分にも気づいた。多くの人にとって、今この教科書を手にしている。そう思うと、それまで感じていた「重み」が、まったく別の意味を持ちはじめた。大切に扱うというのは単なるルールを守るのではなく、人と人、そして社会とのつながりに気づき、それに応えようすることなのだと、私は初めて本当の意味で理解できた気がした。

早速家に帰って教科書について調べてみると、教科書は「義務教育教科書無償給与制度」によって無料で支給されていることがわかつた。この制度は、憲法第26条にある「義務教育は無償とする」という考えを実現するために、昭和44年から本格的に始まつたそうだ。

その制度の背景には、「全ての子どもに平等な学びの機会を」という社会の願いが込められている。つまり、教科書は私たち一人一人に未来を託してくれているのだ。それに気がついたとき、何も言えなかつた自分が情けないと思った。今はまだ消費税を払う程度の私たちも、やがては納税者へと変わり、次の世代を支える立場になる。未来を担うというのは、受け取ったものを次の世代へとつないでいくことなのだと思う。

私の将来の夢は、中学校の教師だ。きっかけは、あの先生の姿だった。知識だけでなく社会の一員としての自覚や責任を教えてくれる先生に強く憧れた。教室という小さな社会の中で、生徒たちに大きな影響を与える先生の姿に心を動かされたからだ。

テスト前の重いリュック。その中には、単なる知識だけでなく、私たち一人一人への期待と想いが詰まっている。その重みをしっかりと受け止め、未来を担う一人として夢に向かって歩み続けたい。